



Photo: Masamichi Kishino

マレートの会が2013年度から取り組んでいる長期的な演劇プロジェクト。長崎をテーマに、現地取材、劇本文学、舞台上演を複数年にわたって継続して行うことで、数百年の歴史を誇る大文字の歴史ではなく、それぞれの都市の日常に流れる時間や内面するドラマを舞台として抽出し、舞台空間に立ち上げようとする試み

さくらいけいすけ

音楽家・ダンス批評、音楽場ダンスワロッシュンブ (ADIX) 主宰

桜井圭介は
「長崎を上演する」を観て
演劇は憎いね！ この！ と改めて思う

劇場

に芝居を観に行くと、例えば「由緒ありげな家具調度」が配された19世紀の洋館のサロン」のように見える舞台美術が親切にも「時と場所」を示している中で、それに見合った衣裳を纏った人物たちがグラスを持って談笑したりするならば、たとえ彼らがどうみても日本人でロシア貴族には見えないとしても、グラスの中身が炭酸水だとしても、観客は演劇の「お約束」に従ってそこに起こる事を「理解」し、時に感動もするだろう。

ところが、この「長崎を上演する」では、例えば「レストラン」という場所を表すセットどころか、グラスやフォークやテーブルもない状態で「男女が会食」するさまが「上演」される。もちろん「現代演劇」においては、抽象的なセットや何もない空間での上演したいは珍しいことではない。が、セットも小道具も何もないのに（唯一の具象物であるパイプ椅子に座り）向かい合った者たちが会話をしながら、見えないグラ

スからワインを飲んだり、見えないナイフでステーキを切るといった仕草を平然と行うのだ。こんな演劇観たことないよ！

突然、客席のほうを向きこちらをじっと見つめるので一瞬ギョッとするが、客に向かつて語りかけるという手法も「現代演劇」にはあるよな、と思いきや「この絵はどこの風景ですか？」などと口にした。それで、見えない壁に掛かった絵を指しての言葉だと理解はする。にしても、そこに壁があるとはその時点まで思ってもみなかったのだ、それは驚愕の事実だよ、と思う。

また別の場面。二人の女。一人がもう一人に「ねえ、首すじ、ちょっと触ってもいい？」（あ、レズ関係？）とか思うわけだが、後ろにまわり首筋を触るかと思わせていきなり面を当てる（吸血鬼？）。倒れる女。加害者の女は、倒れた女のシャツをまくり上げ、刃物で腹を切り裂く！ あまりに唐突な展開（ホラーかよ！）に驚くわけだが、ここで私はそれ以上に驚くべき発

見をしてしまったのだ。 「長崎を上演する」では、すべてを無対象演技で行なうことになっている。ということとは、この見えないナイフを持つてる仕草での「腹を切り裂く」という行為は、「腹を切り裂く」ことを表象しているのか「腹を切り裂くフリ」を表象しているのか？ つまり（劇中で）実際に殺戮が起きたの否かが、確定できないことになる！

実際は、倒れた女がムツクリと起き上がり、パイプがあるからもう行かなくっちゃと去っていくのだが、それとも「死んだ女が生き返った」という解釈の可能性は消えない。恐るべき詭計！

しかし、考えてみるとこの「不確定性」は、そもそもあらゆる「演劇」が抱える「演じる」ということ（表象＝代理＝再現）と「演じている俳優+観ている観客」で構成される「上演」の時間空間の「現実」との間に横たわる根源的なパラドックスは、ではないのか？ うーん、まったく演劇って奴は！（憎いねこの！）と改めて思った次第。